



るかの意味を知らずに、神の名をみだりに唱えることを禁止しているものではありません。用いられているヘブル語は「虚栄心、欺瞞、偽り」のために用いてはならないの意で、ヘブル人は、魔術や人を呪うために神の名を用いたり、神の名で偽りの誓いをしたり、神の御名を唱えて自分が神の代理人であるかのように振舞うことが禁じられたのでした。十戒4「安息日を覚え、聖なる日とする。六日間働かし、七日目は仕事を離れ、神を覚える」には、二つの大きな意義があります。1. 創造の秩序の覚えと 2. 創造者の愛の賜物の覚え です。神は六日間、天、地、海、被造物の創造に携われ、七日目、創造のわざを終えて休まれ、安息日を祝福し、聖なるものと宣言されました。「安息日」は創造の時点ですでに制定され、七日目に休むパタンはエデンの園で実践されており、したがって、神は「安息日は土曜日である」ではなく、「安息日は第七日目である」と定められたのでした。また、安息日は神のためではなく、人のために作られたもので、六日間働かし、七日目に休むというパタンがすべての人々に適用されました。すべての奴隷やしもべたちにも休息が与えられるようにと神が顧みられた安息日は、人の益のために与えられた創造者の愛の賜物でした。

十戒5「父と母とを敬え」は、従うとき、祝福に与ることが約束された最初の掟です。個々人が存在するのは両親のゆえであり、このことだけでも両親は敬われるべきなのですが、両親（特に父親）には、子たちに契約の大切さを教える重大な役割がありました。両親を敬うとは、信仰を継承するということで、民が約束の地で生きながらえ、幸せになるためには、両親に従うことは必然だったのです。イスラエルでは、従わなければ死の宣告が下された深刻な掟で、キリストはこの掟を守ることの模範を示されました。しかし、両親への敬意より、神への敬意が優先することは、両親にも父なる神にも忠誠を尽くされたキリストから学ぶことができます。十戒6「殺すな」は、意図的な殺人を禁じた掟です。不法に人の生命を奪うことがヘブル語の「殺人」の意で、神によって神の似姿に似せて造られた人間は、神の許可なくして他人の生命を奪ってはならないのです。生命に対する尊厳は、自分自身の生命に対しても適用されるもので、したがって、自殺も禁じられています。怒りから生じる心の中での殺意も、殺すという行為と同様、禁じられているのです。この掟には、神の似姿に似せて造られた人の生命の神聖さが宣言されており、全ての生命は神が源、神のもので尊厳をもって取り扱われなければならないのです。したがって、逆説的に、生命を尊ばれるがゆえに神は、死刑を制定されたのでした。言い換えれば、この掟は、この世で合法的に定められた「死刑」や「参戦（戦闘員として戦争に出る）」を否定するものではないのです。また、食物のために動物の生命を奪うことも、この掟を犯すものではありません。今日、生命の維持に関して多くの課題が残されていますが、この掟に照らすとすべて、議論の余地なく答えが与えられます。1. 墮胎：母親の胎に宿った瞬間から死ぬまで、すべての生命は例外なく尊厳を持って取り扱われなければならない 2. 安楽死：どのような事情、状況であろうと、他人の生命を奪うことは掟で禁じられている 3. 自殺：生命を与える神のみが、生命を奪うことができる。サタンでさえ、命を奪うことは許されていない

十戒7「姦淫するな」は、聖なる結婚生活の基準を制定するものです。神は結婚を制定され、イスラエルに対するご自分の愛を顕すために、また、キリストと教会とが一つになることに、婚姻関係を用いられましたが、婚姻による夫婦関係には信者と神との関係が反映されるのです。したがって、結婚外の性的関係、姦淫は禁じられています。この掟は、婚前交渉には言及していませんが、モーセ五書に記されている多くの他の掟で、すべての性的不道徳は禁じられています。配偶者に不忠実な者は神との契約に不忠実ということで、そのような者は、他の神々との姦淫すなわち、偶像神、八百万の神々崇拝に陥る可能性が非常に高くなります。不道徳と霊的姦淫（背信）との相関関係は非常に大きく、十戒の多くの掟を犯すこととなります。また、キリストは心の中で、この掟を犯す危険を指摘されました。キリストは、「十戒」を表面的な行為を制する掟としてではなく、それら行為の根源である心の中の罪の問題として、すなわち、罪悪感のない人間はいないことを指摘されたのでした。十戒8「盗むな」には、誘拐して人を酷使したり、奴隷に売ったりすることの禁止も含まれています。能力や力と同じように、人に属するもの、所有物、財産はすべて神からの賜物です。それゆえ人は、神に対して、どのように物質、所有物を取り扱うかの責任があるのです。したがって、盗みや搾取のような不相応、不法な獲得は罪と定められます。この掟は個人の財産、所有物を認めることを前提としており、したがって、資本主義を容認しているといえます。他方で、社会主義や共産主義は他人の労働の成果を一律に分配することを定めているので、働きたくない者の略奪が許されている平等主義といえるかもしれません。十戒9「隣人に偽証するな」は、うそをつくことに言及しているのではなく、偽りの証言を禁じているものです。法廷における証言に関する掟ですが、ゴシップも偽証に含めることができます。どのような形であれ、中傷、悪口、偽りの陳述はすべて、偽証に入ります。また、だれかが中傷されているのを傍観することもこの掟を犯すこととなります。十戒10「隣人の家、妻、奴隷、家畜……を欲しがらな」は、ないものねだりを禁じている掟です。この世の掟の中で、このように心の中の「間違った動機、意図」を取り扱ったものはほかになく、この掟は、目に見えるところの違反しか裁くことのできないこの世の手段、この世の法廷では取り扱うことのできない掟なのです。隣人のものをうらやむ者はえてして、六番目から九番目の掟を犯しがちで、キリストは、法廷では見過ごされてきたこの心の奥底にある罪の問題を指摘されました。この掟に直面するとき、人々は、神の掟を完全には守れない自らの姿、まさに「罪人」の状態に気づかされることとなります。人間の行動には現れない感情的、心理的罪は、神だけが取り扱うことのできる領域であることから、この掟が含まれていること自体が、「十戒」が人間ではなく、真の神によって定められた掟であることを証しているのです。